

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	東京大学	整理番号	S01
プログラム名称	多文化共生・統合人間学プログラム		
プログラム責任者	太田 邦史	プログラムコーディネーター	高橋 英海

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、「統合人間学」の教養的学知・方法知を理念とし、多文化共生社会の価値創造を担う人材育成のための次世代型大学院教育のモデルとなる創意ある文理融合型のカリキュラムを構築しており、高く評価できる。体系的・階層的なカリキュラムを基盤としながらも、国際メンターズチーム制度やプログラム・カルテの活用等により、従来縦の指導体制の枠組みを超え、異なる学問の間の横のつながりを可視化していく大学院教育の体制を整備している。これにより、学生の個性的な研究・キャリア志向に適したオーダーメイドの教育のみならず、知のスタイルの多様性を許容し学問の地平を開いていくことが可能となると思われる。今後もこの体制の維持が期待される。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、「洞察力」、「統合力」、「創造力」、「協働力」をリーダーに必要な能力として措定しているが、定量評価では数値化できない能力の育成も目指しており、修了者がリーダーとは何かについても再定義できるような教育システムを実現していることは十分評価できる。キャリアパスの想定として掲げ、インターンシップの機会を提供してきた国際機関、NGOやNPO、企業、シンクタンク、官公庁、地方自治体、メディア等への就職や起業等についてはまだ実績が伴っているとは言い難いが、今後輩出される修了者が社会で活躍していくことで、本プログラムの価値を証明することになるであろう。また、アカデミア志向の学生に対しても、次世代型の研究者・大学教員とは何かを考えさせるようなキャリア教育プログラムの構築が必要であると思われる。

事業の定着・発展については、平成 30(2018)年度に独自プログラム（メジャープログラム（主専攻）とサブメジャープログラム（副専攻））として常置化したことはある程度評価できるが、定着・発展に向けての全体責任者（学長）を中心とした責任あるマネジメントの体制が十分に整備されているとは言い難い。一部のプログラム担当者の尽力に依存した体制となっているため、プログラムへの安定した財源確保を含めて、大学の執行部による協力体制構築について、今後一層の努力が求められる。教育改革は教員個人の努力のみに委ねられるべきではなく、大学全体として本プログラムの革新的な改革理念を共有していくことが強く期待される。